令和４年度

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同委員会

実践報告書

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同委員会

目　次

○令和４年度　総会及び研修会（講演会）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
講演題：広い世界を生きる子どもを育む
―「架け橋プログラム」と幼児教育の未来

○令和４年度　部会活動報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　19
＜教科別部会＞
・国語部会
・社会部会
・算数・数学部会
・理科部会
・音楽部会
・図画工作・美術部会
・体育・保健体育部会
・英語（外国語活動）部会
・技術・家庭部会

＜領域別部会＞
・総合部会（生活単元学習・遊びの指導・生活科）
・道徳部会
・生徒指導部会
・進路指導（キャリア教育）部会
・情報教育部会
・学校経営部会

＜校園別部会＞
・幼稚園部会

＜FD 部会＞

＜教育実習部会＞

○秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会要項・申し合わせ事項　・・・・　52

令和４年度　秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会
総会及び研修会

日　時：　令和５年２月15日（水）
15:00～16:45
会　場：　Zoomにて開催
進　行：　附属幼稚園副園長　　太田　三千代

【　次　第　】

1.　開会あいさつ・講演会講師紹介　（共同委員会委員長　山名 裕子）

2.　講演会（15:05～16:15）

演題：広い世界を生きる子どもを育む

講師：福島大学名誉教授　大宮 勇雄　先生

概要：子どもたちは，私たちが生きてきたような世界ではなく，もっともっと広い世界を生きていきます。私たちが想像もつかない世界に羽ばたき，そして自分らしく生きる子どもを育てるためには，窮屈な学校文化でしか通用しないスキルや態度以上に，大切なことがあるのではないでしょうか。国立大学の附属学校園だからこそできる教育・保育とは？ということをみなさんで考えたいと思います。

3.　謝辞　（教育文化学部長　上田 晴彦）

4.　各部会（16:25～16:45）

※終了後，部会ごとに解散。

今年度の部会報告書を２月28日（火）までに副委員長 保坂和貴までメールにてご提出ください（アドレス：hosaka@gipc.akita-u.ac.jp）。

追記：後日，講演会の録画をアップする予定にしております。当日参加できなかった先生方は，必ず視聴をしていただきますようお願いいたします。

広い世界を生きる子どもを育む
ー「架け橋プログラム」と幼児教育の未来ー

2023年2月15日

大宮勇雄（福島大学名誉教授）

1

はじめに　なぜ、「広い世界を生きる子ども」？

1）「架け橋プログラム」について

〇文科省：**「接続」**を幼児教育の中心課題に位置づけ
・2018年：**「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」**の新設
・2022年～：「架け橋プログラム事業」
　接続期（5歳～小1：架け橋期）の指導書（カリキュラム・事例・教材）
　研修体制の整備と内容の画一化
　幼児期施設と学校との「協働」
〇基本的考え方：**「学校への準備readiness」を全人格的に早期から**
・各学校段階に育てるべき成果を「資質能力」として政府が決定
・PDCA：目標を政府が決めた上で、成果の達成を**評価Check**し、
　　計画Planの**改善Action**につなげる（**実践Do**は「計画のしもべ」）

2

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

イ　自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味 わい、自信をもって行動するようになる。

〇やり遂げることで達成感と自信が身につくなら

全員ができる指導・援助をしなくてはならないし

子どもは「いつでもできる子」でいなくてはいけない・・・プレッシャー

〇できる自信ではなく、学べる自信を育てたい

3

オ　社会生活との関わり 家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

〇こんなに「注文の多い」大人って何なん？

「大人や『公』に尽くす子ども」だけが愛されるという不安

〇人間社会は互いにケアすることを本質とすると大書すべき

〇助け合い励まし合うのがもっともよき学びである、

だから安心して生きてほしい

4

2）子どもの育ちはどうなるか？

たとえば、期限を切って育ちの目標を設定する教育実践の問題

〇「育ってほしい姿」は達成目標じゃないと言うけれど
各々の時期で具体化せよという・・・

〇「期限を切って」育ちの目標を無理強いすると

・「いつも全員が達成」は無理⇒ネガティブな関係が生まれる
・達成度だけで育ちは評価できない⇒育ちを取り逃がす
・残された課題は次の実践者に引き継いでいい⇒孤立と圧力

〇実践における「育ちの目標」の立て方

・育ちの目標は話し合いでいつでも変更可能である
・学びの機会を広げることが最終目標
・次の段階の実践者との人間的な信頼関係を作ることが「接続」

３）「広い世界を生きる子どもたち」に込めた思い

〇私たち以上に「いろいろな場」で生きていく子どもたち

〇早期の成果と訓練にますます傾斜する「学び」
階段を上る度、異なる場への順応or訓練が求められ、
ネガティブな評価を受け続けたら・・・従順だけど臆病に？

〇「学び」に注目することの意味：保育の長期効果研究の結論から

・日々の生活経験を通して子どもたちは学んでいる
・教えられる以上に、子どもたちは学ぶ力と意欲をもっている
・子どもは学びの主体（生きることは学ぶこと）
・学び続ける主体をどう育むか

1　学ぶ力（学力）とは何か？

1）学ぶ力とは

〇学びとは　よりよく成長すること、生きること

〇「学ぶ力（学力）」はテストの点数ではない

　知識やスキルも大事だけれど

　たとえば「信頼される人」がもっているもの

〇学ぶことのむずかしさ

7

2）学ぶ意欲とはどういうものか？

〇学びは必ず壁にぶつかる：わからない、できない、失敗する

　いやになる・どうせできない・失敗の姿を見られたくない

〇学ぶ意欲motivationとは：キャロル・ドウェックの実験

　（Carol Dweck『マインドセット　「やればできる」の研究』）

　４歳児にパズル問題：３つは×　一つだけ〇（全員同じ）

　「好きな問題を選んでやってみて」

　〇をもう一度やる子と×をやる子

　「どうして選んだの？」

〇むずかしい問題に直面したときに何を選ぶか：学びの構え

　×を選んだ子：**こっちがおもしろい、できるかも**⇒学び志向

　〇を選んだ子：**簡単、必ずできる、失敗しない**　⇒結果志向

8

〇学ぶ意欲とは

①**難しいことに自分から**立ち向かう
あきらめずに何度もやってみる

②**その子にとって**難しいことに挑戦すること
むずかしさは比較するものではない

③「できる・できない」という**結果では測れない**
その子の視点に立って、
プロセスを見て初めて、学ぶ意欲は見えてくる

〇学ぶ意欲は性格ではなく、形作られるもの

ドウェックの実験2　小さな失敗をした子にアドバイスして
結果志向の子どもたちは、激しく非難　**＝失敗は悪いこと**
学び志向の子どもたちは、一緒に考える**＝失敗は学びの始まり**

〇学ぶ意欲は育ったり育たなかったりする

結果で評価する大人がいると･･･
その子の視点に立って一緒に考える大人・仲間がいると･･･
子ども集団＝いろんな得意、不得意を持つ子がいる

〇学ぶ意欲は個人内部の「力」ではない
子どもと周囲の環境との相互作用の中で動くもの

事例１　運動会に向けて竹馬に挑戦するT君

【Ｔ君の姿】3歳児クラスの８月から入園したＴ君だが、なかなか生活のところが身に付いていかず、毎日のように何かを忘れてしまい大人や友だちに声をかけられることが多い。行事や遊び、日々の当番など、“みんなで”という取組みの中ではなかなか気持ちが向きにくく長続きしないことが多い。動きは多動であり、静かに話をきくというところでも、どうしても体が動いてしまったりよそ見していることが多く、話しが入っていないことがあるので、個別の対応が必要となる。（視覚を利用し話す必要がある）

【事例１】＜Ｈちゃんと一緒に竹馬の練習＞　９／１０

この日は普段土曜保育に来ないまつ組のM君S君も登園する。ほとんどの子が運動会に向け竹馬の練習をし始めるが、相変わらずT君はタイヤ転がしとなってしまう。そこで、「一緒に竹馬やらない？」と、Tき君に声をかけてみる。すると、「えっー、俺へたっぴなんだよね。」と声しながらも、まんざらでもなさそうに一番低い竹馬を取りにいく姿がみられた。

【事例３】＜最後まで頑張った縄跳び編み＞　９／２８

運動会で使用する縄跳びを自分たちで編む。･･･しかし、Ｔき君、Ａ君、Ｈちゃん、Ｙちゃんは「作る！」とは声にするもののなかなか進まず、「またあとでやる～」といった日々が続く。あえて様子をみていたが、さすがに本人たちにいつまでに編み終えるのか決めてもらうことにした。･･･

今までさぼっていた分長さがあり、なかなか終わらない。そんな中、なかなか進まず最後の一人になってしまったＴ君。自分が最後になったことでは気持ちもさらに切れてしまった姿が。すると、さきほど編み終えた子が「諦めなければ、Ｔ出来るよ！」と励ましに来る。その声にＴ君も「やる！」と、大人も一緒につきながら少しずつ進めていった。気持ちが折れては進み、折れては進んで行く中で「Ｔ、さっきより長くなったね。」「頑張れ！」と励ます子、「次はこの布だよ、この色だよ」とやり方を教えにきてくれるなど、途中途中で友だちの関わりがみられた。Ｔ君もその度に「頑張る。」とつぶやく。･･･

途中でまた手が止まり、間違い続けたり、長さがたりなくて布を継ぎ足すことで気持ちが切れてしまう（また長くなるので）を繰り返しながら、気づけば約１時間も編み続けていた。そのころのＴき君の顔は真っ赤になっていて、「頑張るんだ」という気持ちが伝わってきた。そしてとうとう最後の三つ編みを終え完成した。本人もさらに顔を真っ赤にして「できたー！！」と声にし、「最後までやれた」という思いでいっぱいの様子。

この日をきっかけに、縄跳びや竹馬の練習に対する気持ちが少し変わってきたように感じる。言われたからやるのではなく、“やってみようかなぁ”といった思いが自分から少しずつ芽生えたように感じる。“自分で決めたことを最後までやり遂げた”気持ちが、Tき君の中で自信につながっていったのかもしれない。また、母親も「初めてこんなに最後までやり遂げた姿をみました。」と声にしていた。

【事例７】いろいろなことに挑戦するＴ君　１０／６

ひまわり組のMちゃんが竹馬に乗れずいるのを見つけ「Mゆちゃんが…！」と声にし走って行く。「大丈夫？」と声をかけながらMちゃんと向かい合わせになり竹馬を支えようとする。

少し経ったところで竹馬置き場に中位の竹馬が戻ってきているのに気づき、「ちょっと一人で持ってみてね。俺、竹馬もってくるから。」と取りに向かうＴ君。すると「やぎ先生～！」と呼びに来て「高いの乗れたんだよね～」と嬉しそうに報告してきた。「でも、さっきの奇跡かもしれない…」とつぶやきながら竹馬に足をかけ、何度か足をかけるのに失敗しながらも１０歩ほど進む。「すごいね！」と担任が声をかけると、エへへと笑い、またMちゃんのところへ支えに戻る。

＜振り返り＞

・・・自分で苦手な縄跳び作りを完成させた日からＴき君の気持ちの中で変化（自信）がみられていき、その思いがまた次へと前進させていったように感じる。その諦めない気持ちを持つのが何より苦手だったＴ君が、ここまで困難に立ち向かっていった背景にはやはり友だちの存在が大きく関わっていたからだと感じている。・・・

その後のＴ君だが、運動会後も庭や家で縄跳びや竹馬に自分から練習する姿がみられ、今では一番高い竹馬に乗れるようになり、縄跳びもスムーズに駆け足跳びができるまでになった。今も縄跳びの前回りに挑戦中のＴ君は、「家でＩ００回跳んだよ～」と、練習したことを教えてくれる。また、「これ（縄跳び）、先生がやったら（編んでたら）跳べなかったよ。」と声にする姿もみられた。この姿をみて感じることは、大人がやらせることは簡単だが、やはりＴ君自身が自分から“練習したい”と思い、“自分で出来た、やれた！”といった実感をもてたからこそ、その後も挑戦が続いているのだと思う。

2　学ぶ力、とくに学びの構えを育む

1）学びの構え

○学ぶ力として大切な学びの構え＝学びに対する向き合い方
（好奇心、粘り強さ、コミュニケーション）

○学びの構え（NZの保育関係者の合意）
①関心を持つ
②熱中する
③困難に自ら根気強く立ち向かう
④コミュニケーションする
⑤相手の立場に立って行動しようとする

○学びの構えは個人内の「能力」ではない
子どもと環境との相互作用の産物（「中間にあるもの」）

2）関心と熱中を育む

〇いきなり「困難に立ち向かう」のは難しい
　好きなことをやっているときは誰でも「学び志向」
〇関心はどこから
　心地よい場所：安心できる、無条件で歓迎されている
　身近な場にある「もの・実践・人」
〇関心が続くと熱中になる
〇熱中：集中、長い時間、繰り返し、長期にわたって続く
　　楽しい、笑顔、明日もやりたい･･･
　　熱中は深い学びを作り出す

事例2　「やっぱりドライバーの方ができたね」

<u>●記録</u>

- 排水溝の蓋をはずそうとしている教師の仕事に関心を持ち見ている。「金槌でたたいても無理だと思う。それはドライバーでやったほうがいいよ。」教師がドライバーを取りに行こうとすると、「２本ね」。自分も手伝うつもりで２本のドライバーを準備するように伝える。思うように蓋が取れない。こう太は、自分のドライバーをたてに差し込むので、できた隙間には教師のドライバーを差し込むよう、作業の手順を話す。何度か繰り返すうちに、蓋が少し浮くとドライバーの差し込む位置を角度を変えながら進め、無事排水溝の蓋をとることができた。「やっぱりドライバーのほうができたね。」こう太は自分が手伝ったことで、できたことが満足気だった。

●短期間の振り返り（ここではどんな学びが進んでいますか）

こう太は酪農を営む家の仕事を手伝うことが多く、機械・工具などに関心を持っている。教師が使っているものでは開かないことを作業の様子から予想している。こう太も、ドライバーで実際に手伝ってみたが、自分で予想したよりも蓋は固かった。そこで、差し込む角度・ドライバーの使い方を考え、自分の進め方が間違いないと確信できるまで根気強く続けた。

●次はどうしますか？

こう太くんの知識・関心を引き出したい。こう太は自分から表現することが少ないため、こう太のよさを認め自信を持たせたい。

事例3 「タケノコの物語」

- 記録1　園庭の南東の隅に竹林がある。まことは毎日友だちと協力して汗だくになって夢中になっていることがある。「タケノコ掘り」である。周りを丁寧に掘り大切にタケノコを掘っている。「やったー！　タケノコ取ったよ」はじける笑顔が見られた。お土産にと家に持ち帰る子どもが多い中、まことはたけのこに興味を持って硬い皮をむくと、白いやわらかいタケノコの赤ちゃんが出てきた。
- 記録2　給食にタケノコご飯が出た。「僕が掘ったタケノコを一緒だ！どうやってタケノコご飯を作ったのかな？」「先生が作ったの？」
- 記録3　雨の日の保育室では、まことを中心に粘土でタケノコを作っていた。その粘土のタケノコは実際に食材に触れているので、五感を使って、タケノコを感じているのでとても丁寧で本物そっくりであった。何よりその集中力がすばらしかった。出来上がったタケノコを誇らしげに「先生見て！」と見せてくれた。
- 記録4　「タケノコはどこから出てきたの？」と園庭を深く掘っているまこと。春の図鑑でタケノコを自ら調べている。

＊「やる前は一人一人の学びを考えようと思わず、タケノコを掘っている子どもを見ても、『いいのかな？園長先生に怒られても知らないようー』としか思わなかったのだが、それを粘土で表現している姿を見てこれだ！！と思った。出来事や遊びの中で学んでいるんだと改めて感じた。」

＊「子どもたちが遊びに熱中し打ち込んでいる時、遊びは深く、長時間続く。その遊びには、子どもにとって何かしら意味のあることがある。小さな行動、なにげない行動にも学びの意味を持たせ、発展させられるよい視点である。今までだと『たけのこを見つけて掘りました』という表面的なおたよりで終わっていたであろう活動を、学びの物語の五つの視点から考えることで、皮をむき，粘土に表現し、匂いをかぎ、五感をとぎすます活動へと発展した。本児の『学びの物語』を担任や保護者に伝えると，このような本児の行動に担任も保護者も驚き、そして成長をともに喜び合うことが出来た。」

〇子どもの関心や熱中は長く続く

関心が熱中になり、熱中しているとき思わずチャレンジ

‥→**一回の記録じゃなく、継続して**

〇記録より、解釈が大事

‥→長い、精密な記録はいらない

‥→**振り返って読み返す**

‥→記憶も、他の人の話も

〇一人の視点より、複数の視点で（正解は一つじゃない）

‥→担任任せにしない

‥→正解を決めるのじゃなく、

子どもの見方を豊かにするための話し合い

3）ともに学ぶ、ともに生きる

〇人間の学びの大きな特質

他者から学ぶ：**他者の考えや気持ちを自分のものにできる**

「ともに～する力」が学ぶ力として決定的

〇コミュニケーションする力

自分の気持ちや考えを

さまざまな手段を使って表現する

〇相手の立場に立つ力

共感する、励まし・助け合う、最後までやり遂げようとする

〇「ともに～する生活」が育ちの場

事例5　「だんご虫の赤ちゃん」

ダンゴ虫を見つけて、家を造って遊んでいた幼児たちが、赤ちゃんを産んでいる最中のお母さんダンゴ虫を見つける。A子「赤ちゃん産んでるんだよ、今！！」
保育者「本当だ！」「逆さまになってるんだね。どうしてだろう･･･？！」
かな「産んでるときに痛いからこうなっているんじゃない？！」
ダンゴ虫のお母さんと赤ちゃんのために、新しい家を作ろうと、バケツに畑の土を入れている。A子「あっ！！アリが入っている」「ダメだ！」
保育者「どうしてダメなの？！」A子「赤ちゃんはちっちゃいから食べられちゃう」かな「そうだよ。取るしかない」
一生懸命アリを取り出すが、たくさん入ってしまっていたので、一度土を全部出してあれこれ考えている。そこにＢ子がやってきた。
Ｂ子「どうしたの？」かな「赤ちゃん産んでいるの」（小声でもすごく慎重に）
Ｂ子「どれ？見せて」（小声）
かな「いいよ！」（小声）

●振り返り

ダンゴ虫の出産を間近で見たことで、これまでのさまざまな経験から知恵をしぼって，いろいろなことを考えている。かなの会話や仕草、動きなどからは、知識やダンゴ虫を思うやさしさが伝わってくる。特に最後に、小声で話をしていた姿からは，気持ちを表現する力がとても育ってきていると感じた。

●次はどうしますか

かなの相手（対象は友だちであったり、小動物、虫などさまざまであるが）を思いやる気持ちを十分に認め、まわりの幼児たちへも伝えていくことで、本人の自信につなげるとともに、まわりの幼児たちへの刺激として，クラス全体で共感できるようにしていきたい。また、家庭へもこういった出来事を伝えて、かなの育ちをともに喜び，今後を楽しみにする気持ちをともにふくらませていきたい。

25

〇子どものコミュニケーションは様々な手立てで

‥→記録も様々な手段で

〇学びの構えは「自ら進んで」というところに価値

‥→全ての生活に意味がある

〇「相手の立場に立つ」「役に立つ」：その子の視点で

〇評価とは：保育終了後に行うものではない

保育の中でたえずなされ、かかわり方を方向づける

評価されない学びは、子どもの中から消えていく

学びの構えをどうとらえるか

子どもの姿の中にどんな学びをとらえるか

ただ一つの正解はない　話し合って深めればよい

26

事例６　ダンゴ虫に心臓はあるか？

（福島大学附属幼稚園『子どもの心が見えてきた』ひとなる書房　2011）

サオリのお母さんからの夏休みの生活表に、「何枚も切りためていた新聞の記事を見て、娘のたっての希望で訪れた国立科学博物館での大哺乳類展ではマッコウクジラがダイオウイカを食べるシーンの映像の迫力に圧倒され10分くらいその場を離れませんでした。また、もともと娘は人間の体の器官に興味を持ち始めていたのですが、鯨の模型を見て自分の体と同じもの（耳・胃・心臓・腸など）が鯨の中にもあることが、とても驚きだったようで真剣に模型を見つめていました。

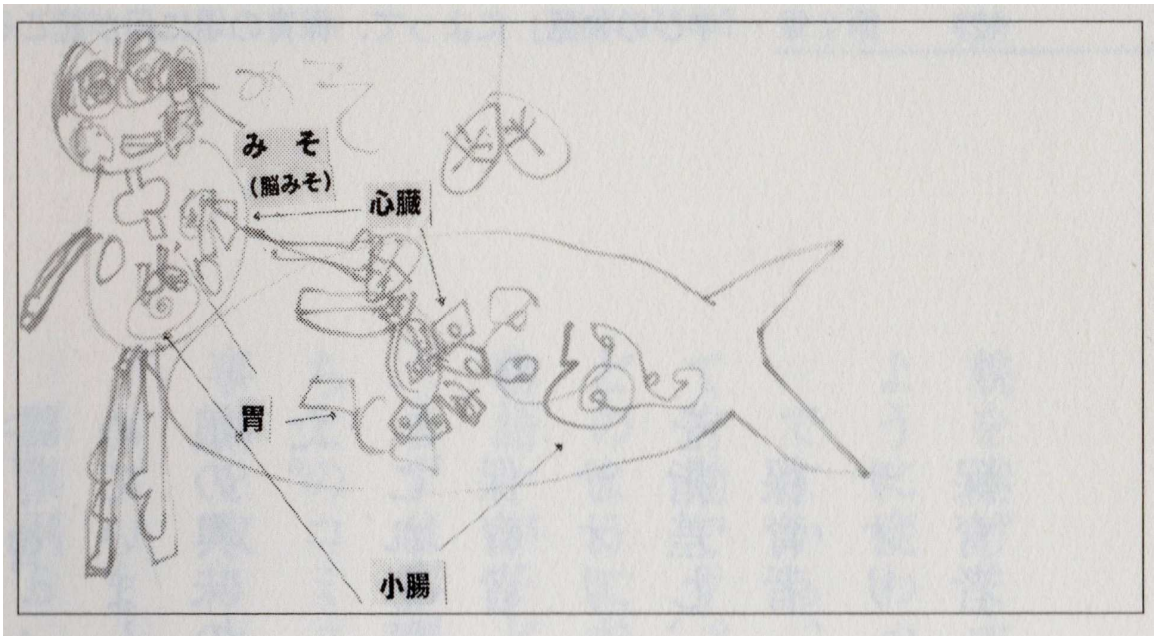
その後も人に鯨の話をするほどだったので、よほど心に残ったのだと思います。娘の興味のあることが深まり、広がっていく手助けができればいいと思います」と書かれていた。

これを読んだ翌日、遊びの中で絵を描いていたサオリに声をかけてみた。

保育者「サオリちゃんは、夏休み東京に行ったの？」サオリ「うん、サンリオピューロランドに行ったの、このシナモンロールがいたの」と絵本を指差し、絵に描いていた。

保育者「そう、他にもどこかに行ったの？」サオリ「クジラがイカ食べるの、見たの！」保育者「先生、わからないから絵に描いて教えて！」サオリ「いいよ！」

しばらくしてサオリは絵に描いて持ってきた。そこにはクジラの中に心臓、胃などが描かれ、隣に描かれた人間の女の子の体の中にも同じものが描かれていた。保育者「すごいね、おんなじなんだね、クジラも人も！」サオリはとても嬉しそうにうなずいた。



　翌日、みんなの前で夏休みの経験を絵を見せながら話すようにしたところ、サオリは自分の番になるのを待ち構えていたようで、呼ばれる前から準備していた。
サオリ「あのね、クジラにもサオリとおんなじ心臓があるの。胃も…」と恥ずかしそうに発表していた。他の子も「心臓」という言葉に反応して「熊にもあるよ」「鳥にも！」と口々に反応していた。
　保育者が「ブロックには？」と問いかけると、「ないよ。だっておもちゃだもの」「動物にしかないんだよ」と他の幼児が答えた。サオリは黙って聞いていた。
　翌日のお弁当の時に「ダンゴムシには心臓があるか？」の話題になった時、サオリだけが「ない！」と言い張り、他の幼児は「あるよ！かたつむりだって！」と言ったがサオリは「ない、鳥もない」と言っていた。

おわりに　上じゃなく、足下と隣を見つめよう

〇接続とか、「資質能力＝育ってほしい10の姿」とか
　小学校に入るまでにというプレッシャが大きくなっている
〇**幼児期にこそ（「今、ここで」）育つものに目を向けて**
〇異なる場で、自分らしく学びつづける力とは：
①「個人内部にある力」ではなく、主体と世界との**間にあって**
　　たえず変化しつつ育つもの
②学び方もルールも異なる場（遊びvs授業、1対1vs1対多数）へと
　その子らしい学びを運ぶのは「学び手としてのアイデンティティ」

〇「接続」に関する国際的研究動向
・「学校への準備ができた子ども“ready for school”」から「**子どもに対する準備ができた学校“school ready for children”**」へ（OECD 2015）
・「よりよい移行」を可能にするのは「個人内部の何か」ではなく、
　子どもの特性と環境との複雑な相互作用
・たとえばNZの報告書（2010）：successful transitionの要因
　子どもの所属感・幸福感、
　相互を信頼し尊重する人間関係（友だち、教師との関係、大人同士）、
　子どもの熱心さや学ぶ意欲への対応、
　教師の期待、

事例4

「かいくんはある日の朝、同じクラスのようくんが家から持ってきた自作のバッチを引きちぎり、『こんなの持ってくるな!』とすごい剣幕です。なおも罵倒し続けるかいくんをようくんから何とか引き離し、事務室で静かに話を聞きます。私『ようくんは、ずっと熱でおやすみしていたから、おうちで作ってきたバッチなんだって』かい『いかんのだわ、保育園におもちゃはもってきていかんのだわ』……かい『ぼくなんて、そんなの作ったら（おうちで）いかんと言われるんだ』かい『ようくんはだめだ、こうきくんやつばさちゃんやみーちゃんはいいけど』

……この名前を聞いてぴんときました。私『かいくん、ひょっとしてようくんは早いお迎えだから?』かい『そうだ、こうきくんたちはいつも夕飯までいてがんばっているんだ。だけどようくんはいつだって早い迎えの子だから許せんのじゃ』

これを言ったときにかいくんは一気に感情がほとばしり、涙が止まりませんでした。思わずかいくんの体を包み込んで背中をさすり、『そうか、かいくんもいつも夕ご飯でがんばっているんだもんね』というと体の力がスーっと抜けました。いつも夕ご飯までの保育にさせられている感じなのかとも思い、『お母さんもさ……』と言いかけたら、『お母さんは仕事をがんばっているんじゃ！　お母さんは悪くないんじゃーっ』と、また力を込めて叫ぶのです。

そうです。かいくんは毎日、毎日友だちが先に帰るのを見送り、いつも同じメンバーでそれなりに楽しく園で夕飯を食べ、遅くまで仕事をする母の迎えを待つのです。母ががんばっていることを知っているから、たまには早く帰りたいとだだをこねたり、ぐずることもしません。毎日過ごしている日常の中に、こんなにも重い気持ちがあったことを改めて知りました」

かいくんは、お母さんが遅くなる理由は十分にわかっていて、だから、早いお迎えの子はいいなぁという気持ちを感じながらも、自分に言い聞かせるようにしてその声を飲み込んだのは何回くらいあったのでしょう。毎日そういう気持ちと格闘していたのでしょうか。そして同じ気持ちでお迎えを待っている友だちの存在に気づいたのは、いつからだったのでしょう。そういう友だちとの絆が、がまんを可能にしてきたのでしょう。自作のおもちゃは持ってきていいという特別ルールを彼はもちろん十分理解しているのですが、しかし、ようくんが「いつも早いお迎え」と「家で作ったおもちゃ」という二つの「特別」を独り占めしているのは「ずるい」こと、許せないことだったのです。だって、ぼくたちには「特別」が一個もないのですから。

彼は毎日、毎日の生活の中で、お母さんとも、遅迎えの仲間たちとも、そして他の友だちとも幾度となくたくさんの「対話」を、大部分は心の中で、ときには聞こえる言葉で、積み重ねてきたのでしょう。その対話から彼が学んだのは、つまり家族とは何か、仲間とはどういうものか、ルールは誰が決めるべきか、「公平さ」とは何かという人生の難問です。彼がようくんに対してふるった乱暴は、理由もない行動のように、いっときの感情の爆発のように見えるかもしれませんが、そうしたものとはまったく正反対のものからあふれ出てきたものです。そのことを、この保育園の職員集団はしっかりと理解しています。

令和４年度　部会活動報告書

部会名	国語部会	記入者名	菅原　美智

＜今年度の実績＞

①附属小学校公開研究協議会　６月 10 日

成田先生、髙橋先生が共同研究者として事前検討会、当日、事後検討会に参加。

②附属中学校公開研究協議会　６月３日

髙橋先生が個人として事前検討会、当日、事後検討会に参加。

③附属中学校の国語部「授業を見合う会」　２月 14 日

成田先生、髙橋先生が参加。

＜次年度に向けた予定・課題等＞

①今年度と同様の取り組みを継続する。

②教科専門の先生方の「教材分析協力者」を小学校以外にも拡大したい。

③各学校園からの希望があれば、教科専門の先生からのミニ講話などの取り組みを試みる。

＜次年度の体制＞

部会長　髙橋茉由先生

副部会長　特別支援学校から

書記　附属中学校から

令和４年度　部会活動報告書

部会名	社会科	記入者名	鈴木　聡（所属　附属小）

＜今年度の実績＞

１　公開研究協議会に向けた取り組み

【小学校】公開研究協議会に向けて、 事前打ち合わせ、 指導案検討を行った。

事前打ち合わせ　５月１６日（月）
提案授業　　５月３０日（月）
公開研究協議会　６月１０日（金）

【中学校】公開研究協議会に向けて、 事前授業を２度行った。

共同研究のお願い　４月２８日（木）　事前授業　　５月２６日（木）
事前授業　　６月　２日（木）　公開研究協議会　　６月　３日（金）

２　部会内での取り組み

【小学校】今年度の研究の方向性を共通理解することを目的に行った。

・校内研修会
５月１８日（水）６年Ｃ組「国の政治のしくみ」

【中学校】今年度の反省をふまえた普段の授業を見合い、授業改善に生かす試みを行った。

・授業を見合う会
２月　６日（月）２年Ｃ組　歴史「近代的な国際関係」
２月１４日（火）１年Ａ組　歴史「産業の発達と民衆の生活」

３　共同研究の取り組み

秋田大学の社会科教育学研究室による授業づくり演習の一環として、小学校・中学校ともに「再生可能エネルギー事業」をテーマにした授業実践を行った。

・小学校での実践　：　７月１９日（火）１３：４０～１５：１５（5年B組）
・中学校での実践　：　７月１７日（火）１３：２０～１５：１０（2年B組）

＜次年度に向けた予定・課題等＞

１　公開研究協議会に向けた打ち合わせ、指導案検討

２　部会内での取り組み（小学校：部内研修会、中学校：授業を見合う会　など）

３　授業づくり演習（学生による授業実践）
小学校：７月上旬（詳細未定）
中学校：７月上旬（詳細未定）

４　初等社会科での講義（６月・７月）

５　秋田県弁護士会との協力（効率・公正について）

６　大学の先生による出前講座の実施（予定）

＜次年度の体制＞

・部会長　　外　池　　智　先生（秋田大学）
・副部会長　石　田　　智　之　（附属小）
・書記　　幸野谷　　憲　司　（附属中）

令和４年度　部会活動報告書

部会名	算数・数学部会	記入者名	高桑　和哉

＜今年度の実績＞

附属小　６月　公開研究会
　　６月　校内研究会
　　２月　校内研究会

附属中　６月　公開研究会
　　１１月　公開研究会
　　２月　授業を見合う会

大学　加藤慎一先生　２月　附属中で授業

＜次年度に向けた予定・課題等＞

附属小　公開研究会（６月以外で実施予定）

附属中　公開研究会（６月、１１月）

大学　　教職大学院の院生　数学４名入学予定
　　中学校で実習の予定

＜次年度の体制＞

部会長　　研究室主任
副部会長　附属中
書記　　附属小

令和４年度　部会活動報告書

部会名	理科	記入者名	石井照久　(教育文化学部)

＜今年度の実績＞

附属小学校

〇6 月 10 日にリモートで実施した公開研究協議会において，附属小の柴田が「水の行方と地面の様子」（４年）の授業実践を報告・発表した。研究協力者として学部の田口と，教材分析協力として林（信）の，それぞれが授業撮影日（6 月 2 日）も含めて参加した。授業参観後に，附属小の柴田，井上，佐藤（咲）および学部の教員も加わり授業の検討を行った。当日に先立ち学部の田口から，提案授業の構成等について事前指導を行った。

〇6 月 21 日に校内研修会を実施した。これに，学部の田口が協力し，指導助言を行った。

〇学部の林（信）が，火山・地層の授業を 11 月 17 日に１学級，18 日に１学級，22 日に１学級という形式で，６年生３学級に２時間ずつ実施した。

〇学部の田口からの依頼で，５，６年生６クラスにアンケート調査を実施した。

附属中学校

〇学部の原田（勇）の指導により，学部４年生の佐々木が，１，２年生８クラスに調査を実施した。

〇学部の田口からの依頼で，１，２年生８クラスにアンケート調査を実施した。

〇10 月 18 日に学部の林（信）が，火山のしくみに関する授業を１年生４クラスに１時間ずつ実施した

〇11 月 11 日に対面とリモートで実施した秋季公開研究協議会において，附属中の藤原が「地層の重なり（寒天モデルや VR を活用して）」（１年）の授業実践を報告・発表した。共同研究者および教材研究協力者として学部の原田（勇）と林（信）が参加した。授業後に，学部の原田（勇）と林（信）に加え，附属の池田，菊地，藤原，学部の田口，石井も加わり，授業の検討を行った。

＜次年度に向けた予定・課題等＞

コロナ禍 3 年目となったが，感染防止対策を徹底しながら，コロナ禍前に近い対面授業を実施することができた。授業では，学部教員の協力により VR の活用などを積極的に行った。次年度も学部教員と協働して ICT の活用をすすめたい。また，公開研究会では，対面式に加えてリモートを活用できた。リモートによる授業研究の方法についても，学部教員との協働によりさらに検討していきたい。

さらに，理科の教員による，附属中学生への放課後の出前講座をリモート授業か対面授業で次年度実施したい。

＜次年度の体制＞

部 会 長：石井照久
副部会長：池田央
書　　記：柴田省吾

令和４年度　部会活動報告書

部会名	音楽	記入者名	吉澤　恭子

＜今年度の実績＞

附属学校園と大学が連携した取り組みとして，以下の教育・研究活動を実施した。

【附属小学校】

音楽専科・大山光子教諭が諸事情にて年度途中よりクラス担任（1 年生）に配置換えとなり，当初の年度計画等に変更が生じたが，以下の活動を実施することができた。

（1）附属小学校公開研究協議会（オンライン）

2022 年 6 月 10 日（金）11:20～12:20　（授業者：大山光子 共同研究者：吉澤恭子）

6 年 A 組　研究テーマ「音楽のもと」を意識し，音楽と豊かに関わる子どもを育む学び」

単元・題材名「曲の感じを生かして，豊かに表現しよう～ぼくらの日々～」

（2）小学校教員免許取得必修選択科目「初等音楽」（担当：吉澤恭子）演奏動画制作および音楽鑑賞会の提供

・受講者 3 年生 10 名：英語教育コース 1 名，教育実践コース 9 名（体育，社会，英語，音楽）

・準備期間：2022 年 10 月～11 月（附属小学校・コーディネート：大山光子）

・音楽鑑賞会（演奏動画の視聴による）の実施：2022 年 12 月初旬

小学校音楽科の応用的な実践力の育成を図るため， 公立小学校での教育実習後の学部 3 年後期に開講している「初等音楽」では，2018 年度より附属小学校に出向いて学生たちの生演奏による「訪問演奏会」を企画・実施している。2020 年度からコロナ禍で対面実施が叶わず，今年度も演奏動画を制作し， 動画を児童の音楽鑑賞教材として活用していただいた。事前に小学校側から鑑賞曲目等の要望（3 年生の音楽教科書掲載曲・ビゼー作曲《アルルの女》より《メヌエット》）等を受け，今回は小学 3 年生を対象とした音楽鑑賞プログラムを立案した。受講生それぞれが得意とする歌や楽器演奏,そして編曲に携わり，演奏動画を 11 月末に完成させた。12 月初旬に，附属小学校 3 年 3 クラスの児童（85 名）が動画を視聴した。児童による鑑賞後の感想シートを「初等音楽」の活動の振り返りとして活用した。音楽を感じ，聞き取る力，音楽の要素等への着眼点，そしてそれらを言葉で書き表す力など，児童の様々な実態を把握できたことが，受講生にとって大きな収穫であった。

【附属中学校】

公開研究協議会の他，例年以上に多くの実践・研究活動が行われた。

（1）附属中学校春季公開研究協議会

2022 年 6 月 3 日（金）（授業者：清水功一　共同研究者：石原慎司）

2 年 B 組「詩のイメージに合った歌をつくろう～教育用ボーカロイドを活用した知覚と感受の視点で歌をつくる活動は，より豊かな感性の伸張につながったか～」

ボーカロイドと ICT による旋律創作授業を実施した。

（2）附属中学校芸術祭における合唱コンクール生徒指揮者講習会

2022 年 9 月 1 日（木）・9 月 6 日（火）17:30～18:00　全学年

（講師：石原慎司　会場：附属中学校）

（3）附属中学校芸術祭における特別オーケストラの演奏発表

2022 年 9 月 9 日（金）13:00～　会場：アトリオン音楽ホール（指揮・指導：石原慎司）

オーケストラ参加者数：生徒 18 名，教員 3 名，保護者（秋田大学 OG）3 名　計 24 名
曲目：エルガー /《愛の挨拶》，モーツァルト/ 交響曲第 29 番イ長調より第 1 楽章
練習日：8 月 4 日，8 月 23 日，9 月 1 日，9 月 6 日，10 月 8 日（計 5 回）

（4）授業を見合う会
2023 年 1 月 26 日（木）11：45～12：35（オンデマンドでも実施）
（授業者：清水功一　　助言者：石原慎司）
1 年 B 組「リコーダーアンサンブルに挑戦」～アーティキュレーションと奏法を工夫させるリコーダー合奏授業の実施。

（5）日本学校音楽教育実践学会例会における研究発表（オンライン）
2023 年 2 月 11 日（土）14：30～15：00　（発表者：石原慎司・清水功一）
発表題目「ボーカロイドを用いた ICT による創作授業とその教育効果について」

＜次年度に向けた予定・課題等＞
・附属小学校の公開研究協議会は 2023 年 9 月 29 日（金）に，附属中学校は春季（6 月）・秋季（11 月）に開催が予定されている。
・2022 年 4 月，附属小学校に中田貴広教諭が公立小学校より赴任，2022 年 10 月には川辺茜助教（声楽）が着任した。表現・歌唱領域において，連携を図りながら協働的な取り組みに着手していくことを予定している。
・附属中学校では，オーケストラ活動を可能な限り継続させること，授業研究から見出した教育効果をさらに検証していくことを今後の課題としたい。

＜次年度の体制＞
部会長：吉澤　恭子
副部会長：石原　慎司
書記：川辺　茜

令和４年度　部会活動報告書

部会名	図画工作・美術	記入者名	長　瀬　　達　也

＜今年度の実績＞

・附属小学校

今年度から全校の研究主題が「自律した学習者を育てるⅡ　子どもと教師でつくる『学びのものさし』」となった。初めは，図画工作科における「学びのものさし」の具体像がつかめなかった。しかし，「学びのものさし」が全員に共通するものではなく，一人の一人の「学びのものさし」でよいことが確かめられた。よって，表現や鑑賞での一人一人の学びの過程の多様性を尊重する図画工作科でも，自信をもって作成に取り組んでいる。

この新研究主題１年目における公開研究協議会での図画工作科研究授業について，学部の長瀬達也は，次のように評価している（附属小学校ＨＰより一部抜粋）

題材「ぐう，ちょき，ぱあで，へーんしん」（１年Ａ組）の成功要因

本題材に取り組んだ子供たちは，試行錯誤をいとわず，最後まで思考停止に陥ることなく手を動かして，自分の形や表し方を追究していた。成功要因の１つとして指導者は，導入で「見付けた折り方や切り方を子どもたちの言葉」で示して「本時ではどんな折り方・切り方を試すか」という見通しをもたせたことを挙げている。このことで指導者は，子供たちに「学びのものさし」を確かめさせたとし，更に「前時までと本時の学び」をつなげるという機能を果たしたと分析している。この分析に筆者も同感である。筆者が考える図画工作科での指導者，つまり教員の役割や立ち位置の理想を示してくれたと考えている。

成功要因はこれだけでない。本題材は単純に「造形遊び」，「絵」，工作」などと，たった１つに限定できるものではない。例えば，「造形遊び」のよいところも十分に含まれるように構成されていた。公開授業では「造形遊び」の本質である「自分なりのイメージを基に，思いのままに発想や構想を繰り返し，手や体全体の感覚などを働かせながら技能などを発揮していく」という姿も十分に確認することができた。子供たちの興味や意欲が持続して，まさしく「発想や構想を繰り返し」，「手や体全体の感覚」が活性化していた。本題材は多様なねらいや内容が，子供たちの実態に合わせて構成されていたので，図画工作科が願う子供たちの姿を具現化することができた。

図画工作科の「学びのものさし」

図画工作科では，子供たちの表現や鑑賞の過程や方向性が拡散的である。図画工作科では他教科よりも一人一人の学びの歩みが，指導者の予想の範囲を超えて広がる。指導の難しさでもあるが，子供たちの成長には望ましいことで，慌てないでほしいと筆者は日頃から考えている。

収束的ではなく，拡散的になることが必然的な図画工作科の表現や鑑賞の学びでは，子供たち一人一人の個性的で独立した探究となる。よって，学びの歩みにおいて，子供たちは他者を頼りにくいので「迷い」を生み出していく。ここで図画工作科の「学びのものさし」が登場する。

図画工作科の「学びものさし」は，子供一人一人が自分のゴールに到達するための「地図」，「方位磁石」，「ツール袋」などであると筆者は考えている。この「学びのものさし」は，子供たちが相互鑑賞や美術家などの作品鑑賞，系統的指導の中での試行錯誤を大切にした造形活動などの積み重ねによって，更新され，成長すると考えている。

子供たち一人一人が，確信して，あるいは安心して「自分」の「学びのものさし」をもてるために，佐々木恵実践を大いに参考にしていただきたい。

・附属中学校

美術科研究テーマは「思いを形や色彩などで表現し発信する。―発見、ひらめき、共感が生まれる学びを通して―」である。具体的な実践事項としては，ＩＣＴの３つの特質，そして対話を取り入れた授業を実践した。ＩＣＴの活用による瞬時の判断と柔軟な授業展開，そして授業の再デザインを試みた。タブレットは一人一台だが、美術科にとっては全てがプラスというわけではないと考えている。ＩＣＴの活用とアナログの手法、手でものを作っていくという，両方の活動を活かしてやっていくことが大事だと考えている。

公開研究協議会での研究授業では，題材「15 歳の自画像－「ひらめき」「試行錯誤」「共感」を往還しながら，自分らしさを表現できるかー」における発想・構想でのＩＣＴ活用の実践を公開した。この研究授業について学部の長瀬達也は，次のように評価している（附属中学校紀要より一部抜粋）

本題材はいわゆる自画像表現の題材である。自画像表現の題材は，小学校図画工作科や中学校美術科でたくさんの実践があり，現在も題材の「定番」と認識されている。図画工作科や美術科の授業で，デューラー・レンブラント・ゴッホなど有名画家の自画像を鑑賞してから，あるいは意識しながら自画像に取り組んだ経験がある方は少なくないだろう。

頻繁に扱われる自画像表現の題材であるが，授業者が指摘している通り，実は思春期の中学生にとっては非常に難しいものある。「ありのままの姿を表現しよう」などと教師から提示されても，抵抗感が生じると考えられる。

そこで授業者は自己の外見を客観的に描くだけなく，「出身地，服装，場所，雰囲気 ，背景，ポーズ ，持ち物，所属部活動 ，趣味，夢」などに視点を当てて表現することも，「自画像」となることを本題材の導入において，自作のスライドショーによるプレゼンテーション「15 歳の自画像」を提示して丁寧に説明している。

本題材では授業者がＩＣＴ活用を提案している。提案が可能なのは，ストレス無しにＩＣＴを使いこなせるところまで，本校生徒が成長しているからである。本校では全教員が教育活動全体で継続して，ＩＣＴを教育活動のツールとして活用している。この環境によって生徒たちも，ツールとしてＩＣＴを学習や表現で活用することができている。この成果や価値は大きい。

普段から継続的に，クレヨン・パスや水彩絵の具のように，これから一層身近な存在となるＩＣＴを習熟して活用することが非常に重要である。表面的な目新しさからではなく，新しい見方や考え方が生まれてくるからである。本題材の授業では美術教育において生徒が得ることや，教員が果たす責任のために，ＩＣＴを活用するという原則が崩れていなかった。生徒たちの中には，オーソドックスに鏡を利用する生徒もいたし，パソコンで参考作品検索や画像編集などを行う生徒もいたのである。ＩＣＴを表現の材料や用具の一つとして選択して活用できるように，生徒が授業者の３年間の指導で成長していた姿があった。

＜次年度に向けた予定・課題等＞

学部美術教育研究室石井宏一から，次年度以降も附属中学校美術科での４年生副免実習では，教育実践コースの美術教育専攻の学生より，特別支援教育コースなどの学生が多い傾向が続く。附属中学校には御難儀をおかけするが，今後も御指導を御願いしたいという報告があった。

＜次年度の体制＞

部会長　　長　瀬　　達　也
副部会長　未　定
書記　　未　定

令和４年度　部会活動報告書

部会名	体育・保健体育	記入者名	松本　奈緒

＜今年度の実績＞

公開研・校内研での協力

・附属小公開研究協議会保健体育５年生器械運動（マット運動）　授業者：佐藤秀恒（附属小）共同研究者：松本奈緒（秋田大学）・三戸範之（秋田大学）

・附属小校内研究協議会保健体育４年生器械運動（とび箱運動）　授業者：伊藤敏幸（附属小）共同研究者：松本奈緒（秋田大学）

・附属中公開研究協議会保健体育１年生体育理論　授業者：藤倉修（附属中）　共同研究者：松本奈緒（秋田大学）

大学での授業への協力

・秋田大学教育文化学部専門科目「保健体育科教育学」での講話（保健体育教諭になった契機、仕事内容等）外部講師：藤倉修（附属中）　授業担当教員：松本奈緒（秋田大学）

卒業研究に関する協力

・体育の技能意識毎の望ましい体育授業の在り方に関する研究（学部４年　野村恵梨子）アンケート実施等研究協力　研究協力：藤倉修（附属中）　指導教官：松本奈緒（秋田大学）

教職大学院の実習・実践研究に関する協力

・ICT を活用した器械運動の授業に対する実践研究（M1　亀山雄矢）の研究協力　実践指導：藤倉修（附属中）

＜次年度に向けた予定・課題等＞

・卒業論文で「教師の言葉がけ」について研究したいという学生がいるので、附属小学校の方に研究協力をお願いしたい。

・松本（秋田大学）の科学研究費補助金で体育授業の描画分析の研究協力について来年度附属小の方でお願いしたい。

・教職大学院に体育の学生が２名入学する予定である。実習・実践研究等お世話になるかと思います。

・附属小の方より来年度より日程の変更があることが報告されました。６月オープン研、９月公開研究協議会を実施するように体制が変わるということです。

＜次年度の体制＞

部会長　松本奈緒
副部会長　藤倉修
書記　佐藤秀恒

令和４年度　部会活動報告書

部会名	英語（外国語活動）	記入者名	若有 保彦

＜今年度の実績＞

1. 附属小中学校との共同研究（事前検討会 / 授業参観 / 指導助言）
   ・附属中学校 公開研究協議会（令和４年６月 ３日）
   ・附属小学校 オープン研修会（令和４年９月 30 日）
   ・附属中学校 授業を見合う会（令和５年１月 30 日）

2. 教育実習に関連して
   ・事前指導での講義（公開研指導案の活用）および一日実習の実施

3. 大学の授業における連携
   ・「英語科教育学」：附属中学校の教員の授業映像を ICT 活用の実践例として活用。
   ・「初等英語科教育学」：附属小学校公開研映像を異文化理解活動の模範資料として活用。附属小学校教員(2 名)が実地指導講師として指導。
   ・「英語科教育学演習Ⅰ」　附属小中学校の公開指導案を模範資料として活用。
   ・「英語科教育学演習Ⅱ」　附属中学校教員が学生の模擬授業に対してフィードバック。
   ・「初等英語科教育学演習」附属小中学校の公開指導案を模範資料として活用。

4. 卒業研究における附属小中学校での卒業研究調査・実験
   ・昨年度２月に附属小５年生で実施したアンケート調査結果をまとめた。
   ・12 月に附属中で音韻認識に関するアンケート調査及びテストを実施しまとめた。

5. 英語教育関連学会における活動
   ・東北英語教育学会秋田支部 英語授業研究会で附属中教諭が講師担当（令和４年 10 月 1 日）

6. 国際交流室
   ・附属中学校の生徒、秋田大学の留学生、及び英語教育コースの学生による活発な文化交流が実施された。

7. 附属中学校でのホートン先生による講演（3 月 1 日～2 日予定）

＜次年度に向けた予定・課題等＞

1. 次年度（令和５年度）の公開研究協議会等について
   ・附属中学校（菅原先生）令和５年６月２日（金）、11 月 10 日（金）が有力
     -研究主題は「未来を自立的に生きる ～出会い・発見・喜びのある秋田の学びを通して～」（３年次［最終年度］）
     -大学側の担当（共同研究者）は若有
   ・附属小学校（藤田先生）令和５年９月 29 日（金）（令和５年６月９日（金）は第１回オープン研修会を予定（教科は未定）
     -研究主題は「自律した学習者を育てるⅡ― 子どもと教師で作る「学びのものさし」―（２年次）」
     -大学側の担当（研究協力者）は佐々木（雅）

・公開研究協議会における英語科研究授業の事前発信と出席者増
-秋田英語英文学会、東北英語教育学会（秋田支部）、JACET 東北支部への連絡
（藤田先生、菅原先生、若有先生、佐々木（雅）先生、畠山先生から発信）

2. 附属小中学校の英語教育の「小中連携」の充実
・授業を見合う会の具体的計画（年度当初に日程を決めその後適宜調整）
11 月 30 日（木）または 12 月 1 日（金）で小学校、中学校の両方で実施可能か検討
・情報交換のための会議（1 時間程度 2 回）（案）
4 月 7 日（金）17:00 秋田大学教育文化学部 3 号館（2 階）3-234 および書道室
10 月 13 日（金）17:00 秋田大学教育文化学部 3 号館（2 階）3-234 および書道室
・授業者交換による実践的連携（案）
期間：9 月 19 日（火）～9 月 22 日（金）（小学校、中学校ともに）

3. 英語教育関連学会における活動
・東北英語教育学会研究大会への参加
・東北英語教育学会秋田支部 英語授業研究会への参加
・秋田英語英文学会 2023 年度大会への参加
・秋田英語英文学会 online café seminar への参加

4. その他
・地域文化学科教員からの協力
・英語科教員以外の教員からの協力
・ツールの活用と英語力：大学を視野に入れて将来を考える
・国際交流の活性化と英語授業への応用、文化の学び

＜次年度の体制＞
部会長　　佐々木雅子
副部会長　菅原　芳行
書記　　若有　保彦

令和４年度　部会活動報告書

部会名	技術・家庭	記入者名	三浦　幹子

＜今年度の実績＞

〇公開研究討議会

・小学校～題材「めざせ！快適 LIFE ～着方を工夫して快適に過ごそう～」

※前年度と同じ題材を取り扱ったが、被服実験をより効果的に活用し、論理的に快適な着方を検討できるよう学習内容を深化させた。

授業案検討会

教材調達と予備実験準備

公開研究会授業参観・研究討議会参加

・中学校～題材「幼児との関わり」

※コロナによる制約のある中、実践から学べるよう附属幼稚園と様々な調整を行い、幼稚園実習を通して既習事項の確認と活用を行うだけでなく、将来の生活を見据えた学習も行った。

授業案検討会

教材調達

公開研究会授業参観・研究討議会参加

〇教育実習指導

・小学校：主免１期２名（教育実践コース学生、こども発達コース学生）

・中学校：主免１期なし、副免２名（特別支援教育コース学生）

＜次年度に向けた予定・課題等＞

〇授業検討

・学部：附属学校が行ってみたいと検討している授業に積極的な支援をする。

・附属学校：積極的に支援の希望を伝えるようにする。

〇教育実習指導

・事前に学生情報等を共有し、スムーズな指導が行えるようにする。

現時点でお世話になる予定の学生は以下の通り。

小学校：主免１期なし

中学校：主免１期なし、副免２名（教育実践コース）

〇その他

・引き続き可能な範囲で附属学校授業と学部授業とをリンクし、児童・生徒、学生に普段とは異なる学びの場を提供できるよう検討する。

・コロナ規制が緩和されたとしても感染対策が必要な学習内容が多いため、無理なく上手く授業が展開できるように相互協力していきたい。

＜次年度の体制＞

部会長　　堀江 さおり

副部会長　瀬尾 知子

書　記　　佐々木 絵理子

令和４年度　部会活動報告書

部会名	総合	記入者名	中野良樹（秋田大学）　石田浩子（附属幼稚園）　稲垣勇介（附属小学校）　菊地智則（附属中学校）　武田茜（附属特別支援学校）

＜今年度の実績＞

１．附属幼稚園における校園間連携

①　附属小学校との交流

・年長児と１年生

１回目　　７月　４日（月）なかよしタイム①（場所：附幼遊戯室）
内容：七夕飾りを作ろう（A 飾り作り　B 短冊作り　C 一緒に飾り付け）

２回目　１１月１６日（水）なかよしタイム②（場所：附小はとの子ホール）
内容：おもちゃふぇすた（手作りおもちゃであそぼう）

３回目　　２月　２日（木）新１年生体験入学（場所：附小１年生教室・はとのこホール）
内容：歌，学校探検，体験活動（清掃・プリント・タブレット），給食紹介　他

②　附属特別支援学校との交流

・年長児とふたば学級

１回目　　５月３０日（月）あそび交流①（場所：附幼園庭）
内容：ようちえんであそぼう（園庭での外遊び）

２回目　　６月　６日（月）あそび交流②（場所：附幼園庭）　→　２回目中止
内容：ようちえんであそぼう（園庭での外遊び）

・年長児と高等部

１回目　　６月　２日（月）さつまいも交流①（場所：特別支援学校　畑）
内容：さつまいもの苗植え

２回目　　９月２９日（木）さつまいも交流②（場所：特別支援学校　畑）
内容：いもほり

３回目　１０月　６日（木）さつまいも交流③（場所：附幼園庭）
内容：焼きいも

４回目　１１月２４日（木）さつまいも交流④（場所：附幼遊戯室）
内容：さつまいものつるを使ったクリスマスリース作り

※上記交流のほか，畑の草取りで年長が畑に行ったり，さつまいもの提供や手紙や写真のお届けなどで高等部のみなさんが来園したりと，時期に合わせて交流をしました。

２．附属小学校における校園間連携の実績

①　　特別支援学校との交流

１年生とふたば学級

６月２９日（水）１０：２０～１１：０５
場所：附属小学校　　内容：よつば学習「なかよくなろう」障害理解授業
特別支援学校の鈴木先生が来て授業

２年生とふたば学級

１回目　　７月　６日（水）　９：２０～１０：０５

場所：附属小学校　　内容：よつば学習「なかよくなろう」障害理解授業
特別支援学校の鈴木先生が来て授業
２回目　　９月３０日（金）　９：１０～９：５５
場所：附属小学校　　内容：各学級と一緒の学習
Ａ組：図工　Ｂ組：体育　Ｃ組：体育

②　附属幼稚園との交流
１年生とそら組
１１月１６日（水）　１０：３０～１１：００
場所：附属小学校　　内容：「あきのおもちゃであそぼう」
Ｃ組「あきのおもちゃフェスタ」を開いて一緒に遊んだ。

③　学部との連携実践
６月１０日（金）　附属小学校公開研究協議会
稲垣勇介：２Ｃ「とびだせ、ふぞくタウン！キラキラたんけんたい」
１０月２４日（月）　附属小学校校内研修会
保坂智子：１Ｃ「あきのおもちゃをつくろう～あきのおもちゃフェスタをひらこう！～」※　研究協力者：学部・中野良樹教授が実践単元の授業への参観および助言，当日の協議会での指導助言を行った。

３．附属中学校
飛翔プロジェクト
特別支援学校中学部生徒との交流会
日時：１１月２９日、１２月５日、１２月１３日、１２月１９日
場所：特別支援学校体育館
内容：ボッチャ競技

４．附属特別支援学校
①　小学校と小学部の交流（生活単元学習）
小学校１年生とふたば学級　１回
場所：本校（7／11）
内容：ペガーボール、まとあて
小学校２年生とふたば学級　１回
場所：小学校（9／30）
内容：玉入れ、塗り絵、しっぽとりゲーム
小学校３年生とわかば学級　３回
場所：本校（6／23、7／4、7／7）
内容：ピン倒しボール
小学校４年生とわかば学級　３回
場所：小学校（10／3、10／4、10／7）
内容：トランプ、ジェンガ、宝探し、ビンゴ、新聞じゃんけん等
小学校５年生とあおば学級　３回
場所：本校（9／26、10／5、11／9）
内容：ピン倒しボール

小学校６年生とあおば学級　３回
場所：小学校（10／27、10／28、10／31）
内容：魚釣りゲーム、まとあて、ボウリング
※この他、教育相談主任が小学校各学年に「よつば学習」（障害理解授業）を実施

②　幼稚園と小学部の交流（遊びの指導）
幼稚園とふたば学級　２回
場所：幼稚園（5／30、10／6）
内容：園庭での自由遊び、焼き芋

③　幼稚園と高等部の交流（生活単元学習）
幼稚園そら組と高等部１年生
場所：本校畑、幼稚園（6／2、9／29、10／6、11／24）
内容：苗植え、芋掘り、焼き芋、装飾作り
（その他観察記録を制作し動画で届けたり、リース作り用の材料を提供したりするなど、間接交流を行った）

④　中学部と中学校の交流
１１月２８日（月）　１０：２５～１１：１５
場所：附属中学校　　対象：中学校１年生
内容：多様性理解学習「ふつうってなんだろう」
特別支援学校　鈴木　後松　松尾

（体育）
中学校１年生と中学部全学年（計４回）
場所：本校体育館（１１／２９、１２／５、１２／１３、１２／１９）
内容：ボッチャ交流

＜次年度に向けた予定・課題等＞
上記交流事業の整理と活用。令和５年度公開研究協議会における授業提案、４年次卒業論文を活用した幼小と大学での共同研究の推進。

＜次年度の体制＞
部会長　中野 良樹（教育文化学部　地域社会・心理実践講座）
副部会長　鈴木 徹（教育文化学部　特別支援・こども発達講座）
〃　　稲垣 勇介（附属小学校）
書記　　武田　茜（附属特別支援学校）

令和４年度　部会活動報告書

部会名	道徳部会	記入者名	小室真紀（附属小）

＜今年度の実績＞

①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み
・指導案の書き方についての講義・演習
教育実習事前事後指導（小学校）：１１月１０日（木）
教育実習事前事後指導（中学校）：１０月２７日（木）

②公開研究協議会に向けた取り組み
・小学校の公開研究協議会に向けて事前打合せ・指導案検討を行った。
事前打ち合わせ　　５月１６日（月）
公開研究協議会　　６月１０日（金）
・中学校の公開研究協議会に向けて事前打合せ・指導案検討を行った。
事前打ち合わせ　　１１月　４日（金）
公開研究協議会　　１１月１１日（金）

＜次年度に向けた予定・課題等＞
１　公開研究協議会に向けた打ち合わせ、指導案検討
２　部会内での取り組み（小学校及び中学校の授業研修会　など）

＜次年度の体制＞　※令和５年２月時点
部 会 長：未定（秋田大学教員）
副部会長：小室 真紀（附属小学校）
書　　記：伊藤 郁子（附属中学校）

令和４年度　部会活動報告書

部会名	生徒指導	記入者名	佐々木真喜子（附属小）

＜出席者＞ 幼稚園：幸野谷　　小学校：進藤，三浦，佐々木
中学校：佐藤（優），藤原，伊藤　　特別支援学校：下村，佐藤（麻）
学部：木村，綾部，北島　　計１２名

＜今年度の実績＞

〇各校園における現状について

小学校：子どもたちは，公立学校と違って学区がないため，家に帰ってから友達と遊ぶ機会が少ない。また，コロナ禍でいろいろな制約があって休み時間も自由に遊べなかったこともあり，コミュニケーション力が落ちている状況である。そのため，遊びに制約がなくなってきた現在，遊びの中でのトラブルが絶えない。本来，小さなもめ事やけんかを通して学ぶべきコミュニケーション力が付いていないので，トラブルが多いと捉えている。中学校に上がっていった子どもたちはどのように過ごしているか心配なところなので，様子を聞かせていただければと思う。

中学校：コミュニケーション力不足によるトラブルはそれほど多くない。思ったよりもよく学べる生徒たちだと感じている。当然トラブルもあるが，コロナ禍だから増えているとは感じていない。

特　支：コミュニケーション力不足は感じるが，それがトラブルには結びついていない。

幼稚園：トラブルはないが，コロナが心配で休ませる家庭もあり，長く休んで登園すると，園生活に馴染めない子どももいる。

大　学：大学生は，３年目に入り制限がなくなってよかったという学生もいるが，当初は制限があるおかげで，人とコミュニケーションをとらない，人と顔を合わせないことがありがたいと元気を回復する学生も一部いた。対面・口コミで情報を集めている学生が遠隔授業になった途端に不調になる現象もあった。

・スクールカウンセラーで公立小中学校を見ていると，コロナ以前から，子どもたちは同年代で問題解決せず，大人が仲介して大人が代理解決する時代になっており，コロナでその傾向が更に進んでいるのかもしれないと，みなさんのお話を聞いていて感じた。

〇昨年度，話題に出ていたコロナ禍の影響による睡眠の問題について

・今年度，四校園養護教諭部会の研究で，睡眠教育の専門である綾部先生からお力添えいただき，ありがとうございました。メディア機器使用による生活リズムの乱れからくる睡眠への影響について，綾部先生からご指導いただいた。綾部先生が他の学校などで調査されている中で，コロナによる睡眠への影響があったら，教えていただきたい。

（綾部先生）

・生活リズムが乱れたというのはあるが，二極化していると言われている。いろいろな制限で部活動や塾がなくなって，ゆとりができ睡眠時間が延びて安定した一方で，元々家庭が安定していなかったり，メンタルヘルスの問題があったりして，逆に崩れてしまい昼夜逆転になってしまうというのがある。具体的な要因とはっきりとはいえないが，睡眠時間が延びて，「睡眠は大事だ」ということがコロナを踏まえて見直されていて，睡眠の質や睡眠に関連する商品も売れている。しかし，また元の生活に戻ると，子どもたちの短くなってしまう睡眠時間をいかに確保しつつ，メディアとの付き合い方をどうするか今後模索していくところである。四校園のメディアコントロールにチャレンジの取組を今後も継続していくことで，良い影響が明らかになればよいと感じた。

＜次年度に向けた予定・課題等＞

・中学校で，大学の先生の話を生徒に聞かせる機会があればよいと感じた。教科で大学の先生に来ていただいて授業をしていただくという取組をしているので，今のような大学の先生の研究と子どもたちの健康な生活に関わるお話を聞く機会を来年度持ちたいと思った。

・コロナでこの３年，ダイナミックな活動ができなかったが，この春から元に戻っていくかなという見通しがある。特別支援学校では，幼，小，中とたくさん交流させてもらっている。また，大学でも販売の場所を借りてやらせてもらっている。コロナ前にやっていた活動をできるだけやっていき，四校園の関わりを戻していけたらと思っている。大学資源を生かして，たくさん関わらせてもらえればうれしいと思っている。

・大学教員への講演依頼や共同のケースカンファレンスする機会があればと思っているので，声をかけていただきたい。（北島先生）

・睡眠教育やソーシャルスキルトレーニングなどもやっているので，依頼があれば協力したい。（綾部先生）

＜次年度の体制＞

部会長　　北島正人

副部会長　伊藤晃子（中学校養護教諭）

書記　　幸野谷ひろみ（幼稚園養護教諭）

令和４年度　部会活動報告書

部会名	進路指導（キャリア教育） ・道徳・特別活動と合同	記入者名	前原和明

＜今年度の実績＞

令和５年２月 15 日の令和４年度秋田大学教育文化学部附属学校学部 共同委員会総会及び研修会の終了後に、オンラインにて、進路指導（キャリア教育）部会を開催した。なお、本部会は、道徳及び特別活動部会との合同で実施した。計９名の参加があり、意見交換を実施した。

意見交換では、以下のような意見があった。

・特別活動に関して

退官された森和彦先生の指導の下で実施されてきている附属中学校の特別活動での「人生の木」あるいは「ネス評価」の実践の検証に向けて、後任の先生から指導を得たいがどのようにしたらよいかとの質問があった。

→これについては、心理実践コースとの連携が想定されるため、後日、適切なところと連絡が取れるように配慮したいとお伝えした。

・進路指導（キャリア教育）に関して

附属特別支援学校より、附属中学校におけるキャリアノートの活用状況に関する質問があった。→附属中学校より、実践に関する情報提供を頂いた。

その他、附属特別支援学校と教育文化学部（学校教育及び地域文化）の連携による教育実践の促進に向けて、継続的な情報交換の必要性について確認した。

＜次年度に向けた予定・課題等＞

引き続き、随時の情報交換を行っていくこととする。特に、部会長を中心に役員がうまく介在することで、情報交換の促進を目指すこととする。

＜次年度の体制＞

次年度の体制については、以下の通りとする。

部会長　　前原　和明
副部会長　黒木　良介
書記　　益満　環
※人事異動等により従事が難しい際には、発生した段階において変更をすることとする。

令和４年度　部会活動報告書

部会名	情報教育	記入者名	林　良雄

＜今年度の実績＞

◎各校の ICT の活用について報告を行った。

・附属小学校

TEAMS　チャットを使っているが、あまり使えない

ホワイトボード

・特別支援

iPad　一人１アカウントをつくり、１２年間利用できるようにした

・附属中学校

全員持ち帰り　デジタル教科書を目指す

C-Learning　アンケート

スクールライフノート

コラボノート

＜次年度に向けた予定・課題等＞

小学校では Google などのサービスを使うことは禁じられているとの話だったので、色々なアプリケーションを使うことができないでいる。

ICT の補助をしている技術職員に問い合わせてみる必要がある。

今後も各校で活用を進める。特に校務の負担軽減となるような Teams の Forms の利用を進める。

＜次年度の体制＞

部会長　林　良雄

副部会長　参加者少数のため決められず

書記　　参加者少数のため決められず

令和４年度　部会活動報告書

部会名	学校経営	記入者名	宇野 力

〔**附属幼稚園**〕（太田三千代副園長）
＜今年度の実績＞
１）幼児主体の保育実践の追求・実践
・研究主題「遊びの中で育つかかわり～かかわりにおける個と集団（２年次）～」
・幼児の主体的な生活及び遊びを保証する環境の構成の工夫
・一人ひとりのよさが発揮され、多様性を認め合うことができるような援助
・日常的な異年齢、学級間の交流ができる温かな風土を支えるチーム保育の充実
・日常の生活、遊びを子どもの視点に立って省察する（園内研究、カンファレンス等）
２）研究推進と地域への発信
・個々の教員の実践力を高めるための研修の機会の保証
・公開保育とオンライン講演会のハイブリッド式の公開研究会（６月）
　シンポジウムと講演会（どちらもオンライン）を組み合わせた保育研究会（１１月）
　（園外・地域と課題や情報を共有）
・大学や他の教育機関との連携（共に学び合う）
３）共に育ち合うコミュニティを目指して
・特に小学校、特別支援学校との交流、連携した研究会の実施
・子育て支援や地域の幼児教育のセンター的な役割を果たすため、大学、幼保推進課、
　市の子育て支援課等との連携
４）働き方改革に向けて
・会議等の効率化・業務（分掌）の見直し

＜次年度に向けた予定・課題等＞
１）研究テーマ（３年次）に沿った研究実践
２）定員充足に向けた取組の充実
３）園の魅力や情報のさらなる発信（HP、おたより等）
４）教員の働き方改革
５）コロナの情勢による新たな感染症対策、学校行事、ＰＴＡ活動の在り方の検討

〔**附属小学校**〕（京野真樹副校長）
＜今年度の実績＞
１）学力保障と生徒指導の一体となった指導の充実
・専科教員による専門性の高い指導体制の継続
・教員の専門教科を生かした学年内での授業交換
・複数教員による児童の実態把握と情報共有を通した教育相談体制の強化
・協同学習の手法を取り入れたペア・グループ学習の推進による親和的な学級集団の形成
２）共生社会の基盤づくりに向けた取組の推進
・総合的な学習の時間における「障害理解教育」（よつば学習）の発展的継続
・スクールカウンセラーや特別支援教育アドバイザー等関係機関との連携による特別な教育的
　ニーズのある児童及び保護者への対応
・教職員の「障害理解」等、基礎的環境整備に向けた研修会の実施

・困り感を抱えた児童のための個別の支援計画や個別の指導計画の作成による指導体制の強化
・子どもの実情に組織で迅速に対応するための「子どもを語る会」の不定期実施
３）ＩＣＴ機器を活用した協同学習の推進
・ホワイトボードアプリを活用した情報の整理・分析の共同化
・Teams を活用した学習動画やノート記録のポートフォリオ機能の充実
・「考えるための技法」を中心とした学習方略スキルの伸長
４）若手教員の実践的指導力向上に資する研修体制の強化
・学習中の子どもの感情の動きにフォーカスした研究協議スタイルの改革
・教科等の専門的な視点から学ぶ子どもの姿を語る機会の設定
・模擬授業を活用した共同参画体制による授業構想過程の確立
５）３０項目に渡る働き方改革の取組
・校務支援システムの電子化
・諸会議のスリム化と効率化
・行事の精選と実施内容の見直し
・教育実習生指導の効率化
・保護者対応の時間制限
・放課後業務の時間確保につながる校時程の見直し
・全教職員へのタブレット端末配付による各種業務のペーパーレス化

＜次年度に向けた予定・課題等＞
１）特別支援教育の視点を取り入れた授業改善及び学級経営の一層の充実
２）公立校が抱える今日的教育課題への対応に資する公開研究協議会の実施内容の見直し
・＃若手教員育成を柱とした校内研修の改革、＃ＩＣＴ活用、＃附属特別支援学校との連携による多様性理解の推進、＃生活科・総合的な学習の時間を軸としたカリキュラム・マネジメント（附属幼稚園との接続期の指導過程の見直しを含む）、＃学部との連携による各教科等指導の専門性向上、＃子どもの学びやすさを重視した授業づくり
３）ＩＣＴ教育の更なる推進

〔**附属中学校**〕（目黒健副校長）
＜今年度の実績＞
１）ＩＣＴを活用した質の高い探究型授業の充実
・研究主題「未来を自立的に生きる～出会い・発見・喜びのある秋田の学びを通して～」
・秋田の伝統的な授業づくりの継承と ICT や対話を意図的に取り入れた授業実践
・春季・秋季研での研究成果の発信（WEB 上での授業映像公開や資料提示）
・全国学テ、県学習状況調査等に見られる成果（高水準の ICT 利活用）
２）自己肯定感の醸成とたくましさの育成
・学級集団を基盤とした温かな人間関係と確かな生徒理解と支持的な風土づくり
（CL、SLN、Teams など ICT コンテンツの積極的な活用）
・学年所属の教員によるチーム対応（短学活や道徳のローテーション）による多面的な生徒理解
３）ＤＸ（デジタル技術による変革）の推進
・生徒１人１台のタブレットを積極的に活用し、完全持ち帰りを実施。家庭での利用や感染症やその他登校できない場合のオンライン学習を常時実施。

・春・秋の公開研究協議会をハイブリッド形式で行った。教室内に３台のカメラを設置し、臨場感あふれる授業配信ができた。
・日常の保護者連絡や学校からの情報発信を紙ベースからＰＤＦやデジタル化を図ることで、効率化や省資源化につなげることができた。

＜次年度に向けた予定・課題等＞
１）主体的・対話的で深い学びの視点からの一層の授業改善
・３年次目の研究を基盤に、個々の教員の授業力向上とＩＣＴを活かした個別最適な学び、協働的な学びを深めていく。
２）生徒主体の活動を通じた自己肯定感・自己有用感の醸成
・附中三精神を常に自覚させながら、生徒第一の視点からの指導計画と支援と適切な評価を継続していく。
３）教員の働き方改革
・超過勤務の常態化の解決に向けた抜本的な取組と教員自身の意識改革を図りながら、心身共に健康でやりがいに満ちた教員生活のモデル化。

〔**附属特別支援学校**〕（松井智子副校長）
＜今年度の実績＞
１）「生涯学習力」を高める授業実践と検証
・単元計画や学習評価を明確にした授業づくり
・積極的に社会資源を活用し、地域社会と連携した実践
・ICT を活用した生涯学習に係る教育活動の充実
２）インクルーシブ教育体制と地域に開かれた教育活動の一層の推進
・附属学校園におけるインクルーシブ教育システム構築の推進
・附属幼・小・中学校における個別の支援体制や校内支援体制への助言等
・「よつば学習（交流及び共同学習を含む）」を通した障害理解の推進
・ミニ学校展やわかはとショップ（アンテナショップ等）等を通した地域展開と発信
３）学校の魅力の発信と教育相談活動の充実による児童生徒定員の充足
・学校の特色を生かした児童生徒の指導・支援に関する実践の発信
・ホームページやリーフレット等を活用した教育活動の積極的な発信
・教育活動の紹介と連動した教育相談や他機関と連携した特別支援教育の推進
４）大学との連携によるキャリア教育の推進と移行支援・卒後指導
・臨床心理、職業リハビリテーションの知見に基づく進路指導、保護者支援の充実
・大学との連携による「生涯学習講座」を通した卒業生指導
・大学内における実践的な職業教育の推進や卒業生の雇用条件等の充実
５）業務内容の精選と整理や進捗状況の「見える化」による働き方改革
・業務計画と業務評価の一体化による進捗状況の把握と調整
・会議等の効率化や業務マネジメントの工夫

※中期計画の中のインクルーシブ教育推進連絡会議について、年度目標達成との関係で、令和５年３月３日に予定しているコーディネーターの連絡会を第１回のインクルーシブ教育推進連絡会議と位置づける。

＜次年度に向けた予定・課題等＞
１）With コロナを見据えた学校運営（感染症対策、学校行事、PTA 活動等）
２）新たな研究テーマの設定と実践
３）定員充足に向けた取組の一層の推進
４）附属学校園における交流及び共同学習の推進
５）働き方改革
６）特別支援学校の役割の問い直し（国連「障害者権利委員会勧告」への対応）

＜令和５年度の体制＞
部会長　　宇野力
副部会長　京野真樹
書記　　秋元卓也

令和４年度　部会活動報告書

部会名	幼稚園	記入者名	瀬尾知子（所属：こども発達・特別支援講座）

＜今年度の実績＞

1. 附属教員の学部での授業

No.	授業名	実施日	担当者
1	教職入門	5 月 11 日(水)	石田浩子
2	教育実習 事前事後指導	7 月 19 日（火）	石川瞳
		11 月 24 日（木）	石川瞳・石田浩子・後藤笑美・今野菜穂子・村上美紀
3	教育実践演習	12 月 2 日（金）	石川瞳・石田浩子・後藤笑美・今野菜穂子・村上美紀
4	こども発達援助論	12 月 15 日（木）	幸野谷ひろみ
		1 月 19 日（木）	村上美紀

2. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

(1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録（大学教員の保育観察・記録　～週１回程度）

① テーマ１：遊びの中で育つかかわり（２年次）～かかわりにおける個と集団～
（附属幼稚園研究テーマ）

② テーマ２：遊びを中心とする保育を考える

③ テーマ３：幼児期の認知発達にふさわしい「学び」とは～幼児が遊びの中で学んでいること～
（山名裕子）

④ テーマ４：幼児期の食育と社会情動的スキルの発達（瀬尾知子）

⑤ テーマ５：幼児期の遊びにおける「身体性」の役割の検討（保坂和貴）

(2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り

① 日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築　　参与観察・保育参加

② 大学における保育講座（秋田乳幼児保育研究会）への附属教員の参加（５回）

③ 大学教員からの研究情報の提供

・研究会報の発行　『秋田乳幼児研究会報第15号』の発行予定

・「研究会たより」の発行

(3) 保育実践研究・保育カンファレンス（学部教員の研究保育・園内研究会等への参加）

No.	実施日	内　容	参加者	備　考
1	4 月 14 日（木）	５歳児（そら組・昼食時）研究保育	瀬尾知子・山名裕子	参観・研究会への参加
2	4 月 20 日（水）	園内研	瀬尾知子・山名裕子	園内研への参加
3	5 月 2 日（月）	４歳児（ほし組） 遊びを語る会	保坂和貴・山名裕子	遊びを語る会への参加
4	5 月 6 日（金）	５歳児（そら組） 遊びを語る会	瀬尾知子・山名裕子	遊びを語る会への参加

№.	実施日	内　容	参加者	備　考
4	5月6日（金）	５歳児（そら組） 遊びを語る会	瀬尾知子・山名裕子	遊びを語る会への参加
5	5月13日（金）	４歳児（ほし組） 研究保育	瀬尾知子・山名裕子	参観・研究会への参加
6	5月17日（火）	５歳児（そら組） ミニ研究保育	山名裕子	ミニ研究会への参加
7	5月18日（水）	３歳児（はな組） ミニ研究保育	瀬尾知子・山名裕子	ミニ研究会への参加
8	5月23日（月）	３歳児（もり組） ミニ研究保育	山名裕子	ミニ研究会への参加
9	5月25日（水）	４歳児（ほし組） ミニ研究保育	鈴木翔・山名裕子	ミニ研究会への参加
10	5月26日（木）	３歳児（もり組） ミニ研究保育	瀬尾知子・保坂和貴 山名裕子	ミニ研究会への参加
11	5月30日（月）	３歳児（もり組） 遊びを語る会	山名裕子	遊びを語る会への参加
12	6月2日（木）	３歳児（はな組） 遊びを語る会	瀬尾知子・山名裕子	遊びを語る会への参加
13	6月6日（月）	公開研打ち合わせ	瀬尾知子・保坂和貴・ 山名裕子	参観・公開研打ち合わせ
14	6月9日（木）	３歳児（もり組） 研究保育	保坂和貴・山名裕子	参観・研究会への参加
15	6月23日（木）	公開研究協議会	鈴木翔・瀬尾知子・ 保坂和貴・山名裕子	公開研への参加 コメンテーター
16	7月14日（木）	３歳児（はな組） 研究保育	山名裕子	参観・研究会への参加
17	8月9日（火） 9:30～11:30	保育研修会	保坂和貴・山名裕子	研修会講師
18	9月13日（火）	５歳児（そら組） 研究保育	瀬尾知子・保坂和貴・ 山名裕子	参観・研究会への参加
19	9月27日（水）	３歳児（はな組） 遊びを語る会	山名裕子	遊びを語る会への参加
20	10月5日（木）	３歳児（もり組） 遊びを語る会	山名裕子	遊びを語る会への参加
21	10月24日（月）	５歳児（そら組） 遊びを語る会	鈴木翔・瀬尾知子・ 山名裕子	遊びを語る会への参加
22	10月27日（金）	４歳児（ほし組） 遊びを語る会	瀬尾知子・山名裕子	遊びを語る会への参加
23	11月30日（木）	オンライン保育研究会	瀬尾知子・保坂和貴・ 山名裕子	オンライン保育研究会への参加
24	2月20日（月）	園内研	保坂和貴・山名裕子	園内研への参加

(4) 教育実習事後指導を通して

① 大学教員及び附属幼稚園教諭が事後指導において学生の保育記録をもとにしたカンファレンスを実施。

② 記録を練り直し，再考察をまとめたものを編集して冊子として作成。

③ 幼稚園教育実習の記録『たまご20号（2022年12月発行）』

3. **附属４校園の交流・参観**

⑴ **附属特別支援学校**

・５歳児のいもほり交流（9月29日，10月6日，11月24日）

附属特別支援学校高等部の生徒を中心に，自校の畑に植えたさつまいもの収穫作業に，年長園児が参加した。５月には水やり，10月には収穫したさつまいもで焼き芋，11月にはさつまいものつるを使ったクリスマスのリースを作成し特支高等部の生徒にプレゼントするなど，年間を通して交流を深めることができた。また，栽培や収穫の楽しさを経験することができた。

⑵ 附属小学校

・５歳児と小学１年生との交流（７月４日，11月16日）

七夕集会や小学校入学を意識した交流会を実施した。

⑶ 附属中学校

・中学２年生の保育参観（6月27日，7月11日，12日，15日）

家庭科「保育」の授業の一環とし保育観察，ならびに交流を深める活動を行い，単元の学習を深めた。

4. **卒業研究の受け入れ**

⑴ ４歳児における親密性　～子ども同士の「ちぐはぐ」なやりとりに着目して～

⑵ ４歳児と５歳児の仲間関係はどのようにつくられるか―自由遊び場面からの検討―

⑶ ５歳児のかかわりにおける規範意識―ある子どもを中心に―

⑷ ごっこ遊びの中で子どもはどのようにイメージを共有しているのか

⑸ ４歳児のごっこ遊びでの「なりきり」―子ども同士のかかわりから―

⑹ 非現実的発言を含む子どものやりとりに関する研究

⑺ 自然物を使った遊びに対する保育者の保育観

5. 授業等での附属幼稚園での観察

教育実習事前事後指導，子ども理解の理論と実践（大学院），子どもの教育と発達（大学院）

＜次年度に向けた予定・課題等＞

1. **大学教員の継続的な参与観察とそれを生かした研究推進**

⑴ 令和４年度同様に，学部・附属幼稚園が連携，協力してそれぞれの立場で研究を進め，その成果を幼稚園研究紀要，学会誌への投稿，学会発表によって地域等に発信する。

⑵ 双方の主体性が発揮できる対等な関係での共同研究体制の模索。

2. **附属教員の学部での授業**

教職入門，教育実習事前事後指導，こども発達援助論，教育実践演習

3. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

(1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録

(2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り
日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築

(3) 学部教員の研究保育・園内研究会・保育カンファレンスへの参加

(4) 教育実習事後指導を通しての学生指導

4. 大学教員の附属学校園の公開研究協議会などへの参加

(1) 附属幼稚園で2回の公開研究協議会を実施予定
第2回目は保育以外の企画（講演，シンポジウム等）を大学教員が担当

(2) 公開保育の事前研究会への参加

(3) 保育へのコメンテーターとしての参加

＜次年度の体制＞

部 会 長：山名　裕子
副部会長：太田三千代
書　　記：瀬尾　知子

令和４年度　部会活動報告書

部会名	FD	記入者名	前原和明

＜今年度の実績＞

令和５年２月 15 日に、附属学校・学部共同委員会をオンラインにより開催した。「広い世界を生きる子どもを育む」に関する講演会の後、教科別部会、領域別部会に加え、校園部会、FD 部会、教育実習部会といった学校の運営面、教職員の資質向上、教員養成という視点による充実させた内容となった。

また、令和５年２月 10 日には教職大学院と附属学校との合同ＦＤを行った。その際、これまでのインターンシップの成果と課題を踏まえ、インターシップの内容に関する協議が行われた。協議では、次年度の教職大学院のインターンシップ（実習）に向けて、内容充実に向けた方法の検討がなされた。

その他、随時、ＦＤ部会の活動内容について部会員間での情報交換を行った。

＜次年度に向けた予定・課題等＞

様々なイベント等との共催等、ＦＤの実施のあり方について引き続きの検討を行っていくこととする。

＜次年度の体制＞

次年度の体制については、書記を担当する会員は無く、以下の体制とする。

また、必要に応じて部会員の補充を行う。

部会長　　前原　和明
副部会長　藤井　慶博

令和４年度　部会活動報告書

部会名	８教育実習	記入者名	細川和仁（こども発達・特別支援講座）

＜今年度の実績＞

教育実習に関する実績については，教育実習実施委員会等に詳しいので省略させていただきます。

＜次年度に向けた予定・課題等＞

▼幼稚園（石川先生より）

- 改修工事によるイレギュラーな形態ではあったが無事に終了した。
- 子どもと接する機会が減ったため，子どもとの関係作りや指導案の作成に課題が残った。
- 学部側で指導するのか園で指導するのか不明確な部分があったので，協議していきたい。

▼小学校（菅野先生より）

- 副免実習期間も，次年度は全校５校時限とする。
- 実習生一人一人のテーマに応じた省察や指導の充実を図る。
  - 省察や模擬授業を通して，個々のテーマに迫ることができるように，実習生の願いや課題意識を踏まえた指導について，共通理解を進めていく。
  - 具体的には，行為を振り返るだけでなく，行為の背景にある感情や児童観・指導観を自覚できるよう研究部から提案されているリフレクションの視点を活用し，全体で共有していく。
  - また，上記の省察を踏まえて，実習生自身が次の行為を選択・決定していくことを最重要視する。
  - そのためにも，失敗しても次の機会を保障できるよう，学習者視点に立った模擬授業・実習授業を計画的に進めていくようにする。
- 来年度９月開催となる公開研究協議会と連携し，事前授業を通して子どもの姿を見取ったり，協議会当日の授業との変容を比較したりする。

▼中学校（藤倉先生より）

- 前年度の教育実習生への事後アンケートをふまえ，今年度の実習を改善することができた。
- ポートフォリオの電子化を進めた。
- 実習生の実習評価等の作業については，ICT 化を進め簡略化を検討する。

▼特別支援学校（髙橋先生より）

- ポートフォリオの電子化が進み，作業が定着してきた。
- 児童生徒の登校時間中にも教材研究の時間を設けた。
- 特に主免実習においては，指導案作成の指導を充実させたい。

▼質疑，情報共有

- ポートフォリオの電子化の様式とその運用について
  - ★本来であれば学部全体で統一された様式の方が望ましいと思われるので，教育実習実施委員会において引き続き検討していただきたい。

・　登校時間中において，実習生の教材研究の時間をどれくらい確保できているか。
・　大学院 FD において挙げられた教職大学院の実習の課題（田仲先生より）

＜次年度の体制＞
部会長　　細川 和仁（こども発達・特別支援講座）
副部会長　藤倉 修（附属中学校）
書記　　髙橋 浩樹（附属特別支援学校）

○秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会要項

（平成24年9月13日制定）

改正　平成25年10月1日一部改正　平成26年9月11日一部改正
平成27年9月11日一部改正　平成30年3月6日一部改正
平成31年3月15日一部改正

（目的）

第1条　秋田大学教育文化学部附属学校運営会議要項第8条第3項の規定に基づき，秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（所掌事項）

第2条　委員会は，学部教員と附属学校園教員との共同・協力に関し，次の各号に掲げる事項を審議する。

(1)　学部・研究科の教育の充実に関すること。

(2)　附属学校園での共同研究及び共同授業に関すること。

(3)　その他共同・協力に係る重要事項

（組織）

第3条　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1)　附属学校経営委員会委員長が指名する附属学校園長

(2)　附属教職高度化センター長

(3)　附属教職高度化センターから推薦された教員　1名

(4)　各附属学校園副校園長

(5)　第8条に定める各部会の部会長

(6)　事務室長

(7)　その他委員長が必要と認めた者

（任期）

第4条　前条第3号及び第7号の委員の任期は1年とする。ただし，再任を妨げない。

2　委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。

（委員長及び副委員長）

第5条　委員会に委員長及び副委員長を置く。

2　委員長は，第3条第1号の委員をもって充てる。

3　副委員長は，委員長が指名する。

（議事）

第6条　委員会は，委員の過半数の出席がなければ開くことができない。

2　議事は，出席した委員の過半数をもって決し，可否同数の場合は，委員長の決するところによる。

（委員以外の者の出席）

第７条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者を出席させ，その意見を聴くことができる。

（部会）

第８条　部会は，教科別部会，領域別部会，校園別部会及びＦＤ部会とする。ただし，教科別部会，領域別部会及び校園別部会は次に掲げる各部会で構成する。

2　教科別部会は，国語部会，社会部会，算数・数学部会，理科部会，音楽部会，図画工作・美術部会，体育・保健体育部会，技術・家庭部会，英語部会（外国語活動を含む）及び生活・総合部会とする。

3　領域別部会は，総合部会（生活単元学習，遊びの指導，生活科を含む），道徳部会，生徒指導部会（個別支援，保健指導を含む），特別活動部会（話し合い活動，学級活動，学校行事を含む），進路指導部会（キャリア教育を含む）及び情報教育部会（情報機器の活用を含む）とする。

4　校園別部会は，幼稚園部会，小学校部会，中学校部会及び特別支援学校部会とする。

（部会の構成員）

第９条　学部教員及び附属学校園教員は，一つ以上の部会に所属するものとし，複数の部会への所属を妨げない。

2　各附属学校園は，領域別部会の各部会に１名以上を選出する。

3　各附属学校園は，校園別部会の他校園部会に１名以上を選出する。

（部会の組織）

第10条　各部会は，互選により，次の各号に掲げる者を選出する。

(1)　部会長　１名

(2)　副部会長　若干名

(3)　記録　１名

2　前項各号の者の任期は１年とし，再任を妨げない。

3　欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。

（庶務）

第11条　委員会の庶務は，事務部において処理する。

（補則）

第12条　この要項に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

附　則

1　この要領は，平成24年10月４日から実施する。

2　この要領の実施後最初に委嘱される委員の任期は，第４条の規定にかかわらず，平成26年３月31日までとする。

附　則(平成25年10月1日一部改正)

1　この要領は，平成25年10月1日から実施する。

2　この要領実施の際，現に委嘱されている第3条第3号及び第7号の委員の任期は，改正後の第4条第1項の規定にかかわらず，平成26年3月31日までとする。

附　則(平成26年9月11日一部改正)

1　この要項は，平成26年9月11日から実施する。

2　この要項実施の際，現に委嘱されている改正後の第3条第4号及び第8号の委員の任期は，改正後の第4条第1項の規定にかかわらず，平成28年3月31日までとする。

附　則(平成27年9月11日一部改正)

1　この要項は，平成27年10月1日から実施する。

2　この要項実施の際，現に委嘱されている改正後の第3条第3号及び第7号の委員の任期は，改正後の第4条第1項の規定にかかわらず，平成28年3月31日までとする。

附　則(平成30年3月6日一部改正)

この要項は，平成30年4月1日から実施する。

附　則(平成31年3月15日一部改正)

この要項は，平成31年4月1日から実施する。

○秋田大学教育文化学部学部・附属学校学部共同委員会に関する申し合わせ

（平成 22 年 7 月 8 日制定）

改正　平成 25 年 10 月 1 日一部改正　平成 26 年 9 月 11 日一部改正

1　委員会の日常的な運営は，副委員長が担当し，各部会との連絡調整，各部会の名簿作成及び報告書作成の調整などを行うものとする。

2　各部会は，年度当初に年度活動計画書を策定し，年度末に年度計画の実施状況等を年度活動実績報告書にまとめ，それぞれ委員会に提出する。

3　部会が作成する年度活動計画書及び年度活動実績報告書の記載内容には，次の項目を盛り込むことが望ましい。

(1)　学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み

(2)　公開研究協議会などに向けた取り組み

(3)　共同研究や共同授業などの取り組み

(4)　学外の研究・研修団体などに関わる取り組み

(5)　部会の組織，運営になどに関する取り組み

(6)　その他の取り組み

4　毎年度当初，学部教員及び附属学校園教員に対し，部会所属の希望調査を行い，部会の構成員を確定した後，名簿を作成する。

5　名簿には，部会構成員の氏名，所属，内線番号及びメールアドレスを掲載し，学部教員及び附属学校園教員全員に配布する。日常的な連絡はメールを活用する。

6　部会長と副部会長は，学部教員と附属学校園教員とで分担することが望ましい。

7　各附属学校園から選出され，領域別部会に所属する附属学校園教員が，他の部会にも所属する場合には，領域別部会の活動を優先する。

8　委員会は，附属学校園教員の領域別部会での活動と他の部会での活動が当該教員の過度の負担とならないよう，可能な限り配慮する。

9　部会は，年度当初及び年度末に全体会を開催するように務める。

10　委員会は，全学部・附属学校教員を対象として，年 1 回以上，総会を開催する。

附　則

この申し合わせは，平成 22 年 7 月 8 日から実施する。

附　則(平成 25 年 10 月 1 日一部改正)

この申し合わせは、平成 25 年 10 月 1 日から実施する。

附　則(平成 26 年 9 月 11 日一部改正)

この申し合わせは，平成 26 年 9 月 11 日から実施する。

令和４年度附属学校学部共同委員会編集部
委員長　　山名　裕子（こども発達・特別支援講座）
副委員長　　保坂　和貴（こども発達・特別支援講座）

令和４年度　秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会　実践報告書
発　行　　令和５年３月 31 日
編　集　　附属学校学部共同委員会編集部
発行者　　秋田大学教育文化学部